

FD への取組

熊崎 雅夫（キャリア教育）

1. はじめに

FD という用語が、ようやく大学人のあいだに定着してきた。この用語が公式に使われたのは、平成 10 年の大学審議会答申である。この答申を受け、文部科学省は、平成 11 年度の大学・短期大学設置基準の改正により努力義務化、さらに、平成 20 年度からは義務化を図った。FD (Faculty Development) とは、「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」のことであり、大学の授業改革のための組織的な取り組み方法のことをいう。ファカルティ = Faculty とは、大学の教員組織を指し、ディベロップメント = development とは、能力開発の意である。(出典ウィキペディア)

これらを受け、各大学は、授業アンケート・研修会の開催・公開授業・教員相互の授業参観等、様々な取り組みを始めることになった。本学は、1 学科のみの短期大学と少人数組織のため、FD センター等の設置はせず、自己評価等検討委員会での審議事項として取り組んできた。筆者はその担当として関ってきた経験から、取り組みや課題について、授業アンケートや授業中の私語対策を中心にまとめてみた。

2. 本学の FD 活動

FD が制度化される以前の授業改善への取り組みは、教員個々が個人的に取り組むのが普通であった。筆者自身も試験時に授業についての感想を書かせ、それを授業改善に活用してきた。また、筆者の場合は、事務職も兼ねていたため、大学として授業改善に繋がられると思うことは、提案・実施してきた。例えば、授業中の私語を減らすために、講義用教室の机の数を減らした。平成 10 年当時の普通教室の机の並びは、2 脚ずつ机と机が付けられ、教室に出来るだけ多

くの机を収納し、収容定員を多くしていた。これは、学生数が多かった、平成一桁の時代には、必要とされていたことである。平成 10 年度以降、学生数が減少し始めたため、各教室の収容定員を思い切って減らし、机と机すべてに間隔を設け、私語がしにくいようにした。また、受講者数に見合う教室の必要性を感じ、20 名収容の教室をあらたに 2 室設置した。これらは、当時筆者が担当していた英文学科の学生の授業で、自身が私語に悩まされていたことが大きい。それで、私語を減らすハード面の対策の一つとして、実施してみたものである。これら教室の変更は、教員間に概ね好評で、私語が減ったという声が寄せられた。

本学が FD といえる組織的な授業改善への取り組みを始めたのは、平成 14 年の授業アンケートの実施からである。当時、授業アンケートを実施している大学は、少なかったため、参考に出来る資料も少なかった。したがって、アンケート様式から集計、フィードバックに至るシステムをすべて手作りする必要があった。実施の目的を教員各自が授業改善の参考にするためのものとし、教員自身がアンケートを実施・回収した。これを自己評価等検討委員会が集計し、アンケート結果が返却される仕組みを作った。平成 14 年度に、まず専任教員の授業から実施し、翌 15 年度から非常勤教員の授業にも拡大した。授業を学生に評価されたくないという、ごく一部の教員を除き、ほとんどの教員の協力を得ることができた。

それ以後の FD 活動は表 1 に示すとおりである。

表 1

年度	主な FD 活動 (授業アンケートを除く)
16	アンケート結果の考察の作成
18	FD 講習会：「FD について」 討論：学生の私語対策
19	講演：「プレゼンテーションの現代的諸相」 討論：授業方法の工夫について
20	講演：「FD とは何か」※ 講演：「シラバスの意義と作成について」※ 専任・兼任教員間の連絡調整会議
21	講演：「厳格な成績評価実現のために」※ フォーラム：「作文指導の理論とコツ」※
22	研修会：「シラバス作成ワークショップ」※ 公開授業：評価の高い授業を参観
23	公開授業週間の設定（前期 13 週目）

※ 東海学院大学 FD センター主催

3. さまざまな課題

授業アンケートの導入の是非が大学人のあいだで、議論されるようになったのは、FD が努力義務化された平成 10 年以降であるが、当時あるフォーラムに出席したところ、

- ・ 授業改善は、これまでのようにそれぞれの教員まかせはよくない。
- ・ 真面目な学生の評価は参考にすべき。
- ・ 不真面目な学生に自分の授業を評価してもらいたくない。

こういった意見が多かったように記憶する。したがって、どの大学もすぐに授業アンケートを実施したというわけではない。FD が努力義務化されて 5 年が経過した平成 15 年度以降、大学の第三者評価が制度化され、FD が評価項目になったことが転機となり、急速に全国の大学に浸透したように思う。

ところで、そのころ全国のいくつかの大学から、授業アンケートの結果と考察がまとめられた冊子が、大学あてに送られてきた。本学も自己点検評価報告書や研究紀要は、全国の大学あてに発送しているが、授業アンケートの結果まで、全国の大学に発送しようとは、考えたこと

もなかったため、少々驚かされた。ある大学(有名大学)から届いた冊子は、立派な製本が施された上質紙に、各教員のプロフィールが顔写真入で紹介され、授業アンケートの結果と考察が 1 人 2 ページを使って紹介されている。授業アンケート結果が芳しくない教員は、考察で言い訳に終始する。これを見ると、“数値が高い” = “よい授業” = “優秀な教員”、“数値が低い” = “悪い授業” = “ダメ教員”という印象が植え付けられてしまう。これでは、数値が低い教員は、さらしものになってしまうのではないかと思わせるほどである。さすがにこれは、行き過ぎと思ったのか、この大学からは、この冊子が 2 度届いたあと、以後送られてこなくなった。授業アンケート導入初期のころは、この取り組みへの評価が定まっていなかった時期とはいえ、授業アンケートが、重視されすぎではないかと思うケースの一つであった。本学も授業アンケートを導入して 10 年近く経過したが、授業アンケートの数値が必ずしも、授業の良し悪しを測る尺度ではないと考える教員が多い。筆者自身も長年集計に関ってきた経験から、授業アンケートの数値がすべてとは考えていない。理由は、それぞれの授業によって、事情が違うからである。講義系の授業より演習系の授業の方が、数値が高くなる傾向があるし、受講生が少ない授業の方が、数値が高くなる。また、科目による有利・不利もある。本学の場合、教養や語学系は専門科目に比べ不利であるし、選択科目より必修科目の方が、評価が低い傾向にある。これらの事情を解説し、考察を加味した冊子を作成し、公表したとしても、数字で示される評価が、読み手にあたえるインパクトは大きい。そんな中、前述の大学のように結果を冊子にして全国に発送したり、Web サイトで結果を公開するなど、行き過ぎではないかとも思える行動に大学をかりたてるのは、少子化による学生獲得競争が理由にあると思う。つまり、“様々な取り組みを情報公開している大学” = “優れた大学”という評価が得られる中で、教員評価につながりかねない授業評価まで、一般に公開されるようになったのではないかと考える。疑問をいくつか挙げるとすると

- 1) 授業アンケート結果の公開は、評価した学生に対してならともかく、一般に公表する意味があるのだろうか？
- 2) 数値が公表されるようになると、教員側も純粋に授業改善に取り組むのではなく、単に数字を上げるために、学生に迎合しすぎたりしないだろうか？
- 3) 教育熱心な先生が、単位を簡単にくれないという理由で、評価が低くなりほしくないだろうか？

そもそも授業アンケート導入の経緯は、授業改善を目的としたものである。結果を公表するのであれば、評価してくれた学生に対して、これをどう授業改善につなげていくかを知らせるために行えばよいと思う。ただし、危惧されるのは、“授業アンケート結果の点数が高い” = “よい授業” = “良い先生” が学生間に定着してしまい、アンケートの点数が教員評価の尺度になってしまうことである。この流れが定着し、シラバスの項目の中に、前年の授業アンケート結果が掲載されるようにでもなったら、教員はアンケートの数値を上げることに専念せざるを得なくなってしまう。

平成 23 年 3 月に行われた、文部科学省主催の大学設置事務説明会で紹介された事例だが、新設学科の設置審査において、大学設置審議会より授業アンケート結果を学生に公開するよう意見がついた大学があったそうだ。これらの流れを見ると、いずれ文部科学省は、授業アンケートを実施するだけでなく、結果の公開まで求めてくると思われる。したがって、今後は学生への公開方法や説明方法が、課題になる。

授業アンケートは、FD の一つであるが、本学で課題とされていることの一つに、授業中の私語対策がある。次の章では、これについて考えてみたい。

4. 授業中の私語対策

FD 研修会等の場では、あまり取り上げられることのない私語対策について、ここでは考えてみたい。筆者自身も、十数年前の教員になりたてのころ、授業中の私語に悩まされたことがある。当時は学生数も多く、筆者が担当する

演習授業といえども 1 度に 50 名以上の受講生を担当していた。あるとき、何度注意しても私語が止まなかったため、つい感情的になってしまったことがある。ある学生に向かって「おしゃべりが止められないのなら教室から出てってくれ」と怒鳴ってしまった。普段の授業は温和に進めていたせいも、教室がシーンとし、効果てきめんだった。しかし、スケープゴートを作ってしまう、後味が悪く後悔した。犠牲になった学生の落ち込んだ表情は、今も忘れられないくらいである。

そこで、何名かの先輩教員に私語対策を相談した。先輩教員からのアドバイスは、

- ① 座席指定にする。
- ② 板書を多くし、書き写させることにより授業に集中させる。
- ③ 「出てけ」と言っ、授業を受ける権利を一方的に奪ってはいけない。「他の学生の迷惑になるので出てってけませんか」とお願いする。

などであった。

①②はすぐに、実践が可能で、実際効果もあった。ただ、③については実行に移すというより、考えさせられてしまった。なぜかという、筆者が大学生のころ、ある語学の授業で、クラスメートが、授業で予習をしてこなかったことを担当教員にとがめられ、態度が気に入らなかったのか、殴られたことがあった。殴られた拍子に眼鏡が飛んで割れてしまったほどで、手加減なしである。当時は、教員の権限は絶大。大学といえども体罰がありえる時代である。何かの拍子に教員の機嫌を損ね、「除籍」と言われようものなら、翌年の再履修で済めばよい方で、運が悪いと留年ということさえあった。実際、筆者のクラスメートは、3 年進級時に単位不足で 2 割近くが留年している。したがって、授業中の私語など、もつてのほか。どうしても話しがしたいときは、筆談したものだった。そんな学生時代を過ごした者にとって、教師と学生の関係についての認識を、変えなければならなかったからである。筆者の出身大学が、普通では無かったのかもしれないが、現代なら体罰どころか、行き過ぎた言動だけでも、アカデミッ

クハラメントで、訴えられる時代である。実際本学でも数年前に、教員と学生の関係が変わったと実感させられた事例がある。授業の進め方に関し（私語に関係することではないが）、ある学生から「意見箱に投書してやる、理事長に言いつけてやる、ネットの大学掲示板に書き込んで、この大学に学生が集まらないようにしてやる」と、脅された教員がいた。これは、極端な事例としても、先輩の助言は、学生の権利が重んじられる時代が変わったことを、実感させられるものであった。

それでは、他大学の私語対策はどうだろうか。前述の有名大学から送られてきた冊子に記載された授業アンケート結果に対する考察を見ると、多くの授業で学生の私語が多いことを、うかがわせる記述がある。私語が多いことに悩むある教員が自身の考察の中で、授業アンケートの自由記載を紹介している。それは、「先生の授業中の私語は他の授業に比べればマシな方だ」というもので、これには、悩んでいた先生が、「他の授業はどうなっているのか？」と考察で書かれている。つまり、教員が考察の中で、自身の授業について、私語が多いと正直に悩みを書く者は少ないようで、学生の私語に悩む教員は、意外に多いのではないかと推察できる。

そこで、インターネットを活用し「授業 私語対策」で検索してみた。すると膨大な件数がヒットする。このことから多くの教員（そのほとんどが大学教員）が悩んでいることがわかる。中には大学入試の不正に利用され、有名になったヤフー知恵袋に対策を相談する大学教員がいる。私語への教育指導“大学授業の生態誌”という本まで出版されていた。また、私語を注意したら逆切れされたと嘆く大学教員のブログも見かけた。それらの中で、参考になるものを見つけたので紹介する。北海道大学高等教育機能開発センター作成の私語対策「あなたの悩みにお答えします～教授法問題別解決策（アイデア集）」である。項目だけ抜粋すると、

1. 最初の授業で私語がなぜ悪いか説明する
2. 私語に反応する
 - ・ただちに注意する
 - ・私語をしている学生をじっと見る

- ・私語の内容を聞く
 - ・退室させる
3. さまざまなテクニック
 - 質問を多用する
 - ・学生に質問しながら授業を進める
 - ・私語をしている学生に質問する
 4. 講義の工夫
 - ・内容を易しくする
 - ・授業の進め方を工夫する
 5. その他
 - ・学生をひきつける工夫
 - ・学生とのコミュニケーション
 - ・出席をとらない
 - ・一律には禁止しない

詳しくは、文末の参考文献に記載したアドレスを参照していただきたい。これは、総合大学に多いマスプロ授業を中心に考えられたものであるので、すべてが参考になるわけではないが、様々なテクニックが紹介されている。他にも少人数授業の私語対策として適していると思われる方法を掲載したサイトが、いくつか見られたので、内容を一部紹介する。

- ・私語の多い学生の名前と顔を早く覚えて名指しで注意する
- ・私語の多い学生の前を定期的に巡回し授業する
- ・初回の授業で私語をしないことを約束させる
- ・退室勧告は出来るだけ避けるが場合によっては考える
- ・毎回小テストを課し授業を聞いてないと出来ないようにする

ただし、私語対策だけを重点的にやっても、授業手法そのものの改善がともなわなければ、私語が減っても代わりに寝る学生が増えるだけのことである。つまり魅力ある授業にしなければ、私語や寝るのを防ぐことはできない。

筆者は、私語に悩んだ教員初心者だったころは、先輩のアドバイスもあり座席指定を取り入れたり、私語をしないことなどを約束させたりもしたが、現在は、これといった私語対策をしていない。選択科目の弱みで、初回の授業で厳しく言いすぎると、選択者がいなくなり、授業が成立しなくなる恐れがあるからである。もう一つの理由は、現在担当する授業の受講者は、

毎年十数名と少ないから、対策をしなくても十分コントロールできるからである。

ところで、ここまで大学の授業の私語対策について書いてきたが、高校ではどうだろうか。筆者は、昨年から新専攻設置準備室の広報の仕事で、近隣の高校 30～40 校を毎年訪問しているので、授業中の廊下を通りかかることも多い。しかし、生徒の私語らしきものが聞こえてきたことは、ほとんどない。高校の教員経験がある先生に実態を聞くと、「そうでもないよ」との返答だったが、授業をうまくコントロールしておられる先生が多いと思う。

5. おわりに

授業改善、本来はもっと本質的な内容の考察を図るべきだが、自分のように、教員になって十数年の若輩が、このようなテーマを論ずるのはおこがましい。ましてや、筆者は、教育学

もろくに学んでいない教育方法に関しては素人である。あるベテランの先生が、教壇に立つときは、常に考え悩むと言っておられた。つまり、この課題については、これが正解というものはないように思われる。したがって、今後も研修を受け、諸先生方の取り組みを参考にさせてもらいながら、これからも悩み続けることによって、一歩ずつ改善に努めていくほかないと思う。

参考文献

北海道大学高等教育機能開発センター「あなた
の悩みにお答えします～教授法問題別解決策
(アイデア集)」

<http://socyo.high.hokudai.ac.jp/Method/sigo.html>

名古屋大学高等教育研究センター「成長するティ
ップス先生」

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/index.html>